

月刊

2020

12  
月号

# みんぱく

特集

## 激変する世界と

## 観光の現在



動く世界と止まる世界 福井栄二郎

ビーチリゾートの観光化と脱観光化 東賢太朗

かりそめの観光、ゆきずりのシーブシー 鈴木佑記

観光と支援の結節点としての民族文化観光 中村香子

アートツーリズムと創造都市 越智郁乃

神になる旧日本軍人、それを訪ねる日本人 藤野陽平

止まらなかった世界のいくつかの片隅に 岡本健

# チェルノブイリの現実

二〇一三年に初めてウクライナのチェルノブイリを訪れた。一九八六年に原発事故を起こしたあのチェルノブイリである。訪問は原発事故跡地の観光利用を取材するためだったが、豊かな自然にソ連時代の廃墟が沈むSF的な光景の魅力に取り憑かれ、創業した会社「ゲンロン」でスタディツアーを企画することになった。いままで五回開催している、コロナ禍がなければこの秋も行くはずだった。

二〇一三年と現在ではウクライナの状況はかなり異なっている。二〇一三年の時点では政権はロシアで、街中にロシア語が溢れていた。ところがその後、民族主義が台頭した。政権が替わり、ウクライナとロシアはいまや実質的な戦争状態にある。首都キエフの標識からもロシア語は一切消えてしまった。

ゲンロンのツアーは原発事故と復興について学ぶものだ。だから最初は民族主義はツアーの目的に関わりないと感じていた。けれども訪問を重ねるうちに、それは誤りだと思ふようになった。

日本人のほとんどは「チェルノブイリ」の名を原発事故で記憶している。けれども、当然のことながら同地には事故以前に長い歴史があった。チェ

## 東浩紀

プロフィール  
1971年東京都生まれ。批評家、作家。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了(学術博士)。ゲンロン取締役、著書に『存在論的・郵便的』(サンポートリ学芸賞、新潮社)、『動物化するポストモダン』(講談社)、『クオ・ヴァミリス』(三島由紀夫賞、新潮社)、『一般意志2.0』(講談社)、『ゲンロン0 観光客の哲学』(毎日出版文化賞、ゲンロン)、『テーパーク化する地球』、『哲学の誤配』(ともにゲンロン)など多数。

ルノブイリを含むポリツシヤ地方は、欧州最大の森林地帯だ。スラブ民族の故郷ともいわれる同地は、近代の国境では境界に位置していて、二〇世紀には繰り返し戦禍の犠牲になった。チェルノブイリはかつてユダヤ人の街でもあった。当地にソ連最大の原発が建設された経緯には、そんな「辺境性」が大きな役割を果たしている。そういう前史は民族抜きには語れない。

大きな事件には土地固有の歴史を塗りつぶす効果がある。チェルノブイリの地を被災地としてみれば、そこには被災者しかみえなくなる。けれども、これまた当然のことながら、彼らには被災以外の人生もある。それを発見しなければ、事故の本質はみえない。ゲンロンの「観光」を通して、参加者がそのことに気づいてくれればと考えている。

ここまで「チェルノブイリ」と無造作に記してきた。じつはそれはロシア語での地名であり、ウクライナ語ではチオルノービリという。事故がなければ、この地がいまもロシア語名のまま記憶され続けることはなかった。チェルノブイリを「チェルノブイリ」と呼ぶこと、そこにすでに政治と歴史が入り込んでいる。

- 10 ○〇してみました世界のフィールド  
アンデス山中に残る古道  
渡部 森哉
- 12 みんなく Information
- 14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
アイヌのテンキとそのひろがり  
齋藤 玲子
- 16 みんなく回遊  
ムスリム女性の装い  
藤本 透子
- 18 シネ倶楽部 M  
コロナ時代の民族誌映画祭  
川瀬 慈
- 20 ことばの迷い道  
モムサル薬お願いします  
諸 昭喜
- 21 次号予告・編集後記

- 1 エッセイ 千字文  
チェルノブイリの現実  
東 浩紀
- 2 **特集 激変する世界と観光の現在**  
動く世界と止まる世界  
——ヴァヌアツ、クルーズ船観光の事例とともに  
福井 栄二郎
- 4 ビーチリゾートの観光化と脱観光化  
——フィリピン、ボラカイ島の開発と汚染  
東 賢太郎
- 5 かりそめの観光、ゆきずりのシージブシー  
鈴木 佑記
- 6 観光と支援の結節点としての民族文化観光  
中村 香子
- 7 アートツーリズムと創造都市  
——フランス、ナント市の芸術祭と地域振興  
越智 郁乃
- 8 神になる旧日本軍人、それを訪ねる日本人  
藤野 陽平
- 9 止まらなかった世界のいくつかの片隅に  
——精神的移動から考えるこれからの観光  
岡本 健

月刊  
みんなく

12月号目次

# 特集 激変する世界と観光の現在

観光のあり方は多様化している。これまで別の文化現象だったものが「観光」という文脈に包含され、これまで「観光」のなかで語られてきたものが、地域住民や観光客との対立、環境破壊の影響を受け、形を変え、文脈をずらされている。変化し続ける観光から何が見えてくるだろうか。

「観光」という文脈に包含され、これまで「観光」のなかで語られてきたものが、地域住民や観光客との対立、環境破壊の影響を受け、形を変え、文脈をずらされている。変化し続ける観光から何が見えてくるだろうか。

観光のあり方は多様化している。これまで別の文化現象だったものが「観光」という文脈に包含され、これまで「観光」のなかで語られてきたものが、地域住民や観光客との対立、環境破壊の影響を受け、形を変え、文脈をずらされている。変化し続ける観光から何が見えてくるだろうか。

## 動く世界と止まる世界

福井 栄二郎  
島根大学准教授

島根大学准教授

コロナによって止まる世界

社会学者のJ・アーリーは現代社会のあり方を「移動」という観点からとらえなおそうとしている。つまりわたしたちは、もはや土地や領土に固定された存在ではなく、常に移動を前提にしている。

もちろん人だけでなく、モノもカネも情報も移動する。こうしたさまざまなものが絶えず流動するなかで社会が再編成され続ける。観光は、この現代社会のあり方を示すもつとも象徴的な現象だとされた。

アネイチュム島沖に停泊している観光船 (2018年)

ところが二〇二〇年初頭から拡大した新型コロナウイルスの影響で、観光産業は未曾有の危機に直面している。七月に発表された国連世界観光機関 (UNWTO) による報告書では、二〇二〇年一月〜五月までの国際観光客数は、前年同期比で五六パーセン

ト減少したという。これは、三億人の観光客と三二〇億ドル (約三四・二兆円) の流れを失ったことを意味する。また五月の国際観光客数に限定していえば、前年同月と比較して九八パーセントの減少である。

コロナが世界を変えたといわれるが、アーリーのひそみに倣うと少し修正が必要だ。これまでだって世界は常に変化し続けていたし、わたしたちはその流れと波に否応なく乗っていた。むしろ、その動きを止めたのが新型コロナウイルスの拡大



アネイチュム島沖の小島にタグボートで上陸する観光客 (2013年)

だった。わたしたちは移動をやめることで、逆説的に、いかに移動に依存していたのかを知ることになったのだ。

観光船がやって来て、そして来なくなった

わたしがこれまで調査してきたのは、南太平洋のヴァヌアツ共和国、アネイチュム島である。ヴァヌアツの最南端にあり、人口は九五〇人ほど。人びとは自給自足的な生活をしており、島には電気もガスもないし、当然、観光ホテルもない。しかしこんな島にも観光客はやって来る。それも大型のクルーズ船で、一度に二〇〇人以上が、海の

向こうから (多くはシドニーから) やって来るのである。アネイチュム島の南西沖に、サンゴ礁の小島が浮かんでおり、観光客はここで一日、海水浴やアトラクションを楽しんで、夕刻には別の停泊地へと向かう。

ここ数年、この観光船の往来が増えたことで、島がざわついている。一方には観光客の落とす現金で、生活が豊かになったと喜ぶ人がいる。そして他方には、多忙になったためこれまでのような生活ができず、激変する日常を嘆く者がいる。いずれにせよ、頻繁にやってくる観光船は島の生活を少なからず変え、島民たちを混乱させた。

そして今回のコロナ禍は、太平洋の小島で暮らす人びとの生活にも降りかかった。今年三月、オーストラリアを出港したクルーズ船のなかに陽性反応を示した観光客がおり、停泊地だったアネイチュムも感染が疑われた。多くの島民が検査の対象とされ、結果が出るまでの数週間、島は完全にロックダウン状態となり、外部との接触が絶たれた (結局、島民に感染者はいなかった)。

クルーズ船観光再開は、早くてもクリスマスシーズンのようだ。しかも来航回数は大幅減が予想される。現金に依存し始めた生活が、また急激に変化することになる。彼らは定着しつつある観光業を取り戻すのか、それともそのリスクゆえに手放すのか。今後も注意深く調査する必要がある。

観光の現在とこれから

これまでも観光は常に変化のなかにあった。人



観光客向けに売られているおみやげ品 (アネイチュム島、2018年)

類学ではおなじみの議論なのだが、観光文化は決して変化を拒むものではなく、むしろ近年に創られたものであることが多い。あるいはそれまで観光とは無縁だった場所が、観光地化されるということも頻繁に起こっている。ドラマや映画、アニメの舞台になれば、とたんに「聖地巡礼」の観光客が押し寄せる。また数年に一度おこなわれる芸術祭は、なんの変哲もない地域コミュニティを、そのまま巨大な観光地へと変えてしまう。

本特集では、世界各地の観光地の現状を報告する。どの場所も、人とモノと情報のフローのなかで変化し続けており、各執筆者はその流れの一瞬をとらえ、詳細に記述している。変化を引き起こすのは、何もコロナウイルスだけではない。繰り返すが、観光地は移動と変化の中継地点である。そこに一歩足を踏み入れるだけで、わたしたちは現代社会のあり方そのものを目の当たりにすることができらるだろう。



海水浴を楽しむ観光客 (アネイチュム島、2013年)

# ビーチリゾートの観光化と脱観光化

——フィリピン、ボラカイ島の開発と汚染

東賢太郎

名古屋大学准教授

## 世界一のビーチ

フィリピンのボラカイ島は、二〇二二年にアメリカの『トラベル・アンド・レジャー』誌で島部門一位に選ばれたこともあるビーチリゾートである。全長四キロメートルの白い砂浜、青い海と立ち並ぶヤシの木、ビーチから望む眼前に沈む夕日などの美しい自然環境と、適度に制限されながらも十分に開発された施設や設備の両立が、ボラカイの魅力である。

## 観光開発と環境汚染

しかし二〇一〇年代に入り、世界的な知名度を獲得し観光客が急増すると、観光開発も急速に進行し、自然環境が目に見えて悪化するようになってきた。環境汚染の象徴としてよく引き合いに出されるのが、異常発生した緑の藻である。人びとは緑の海のなかで藻に絡まりながら泳ぐことを余儀なくされている。

それに対して講じられるゴミや排水の規制といった対策は、ホストにもゲストにも抑圧的に作用し、何よりも急速に増加する観光客数とそれともなう開発には到底追いつかなかつた。ボラカイ



ボラカイ島のビーチに異常発生した緑の藻 (2017年)

イ島の人口は三万二〇〇〇人程度、それに対し二〇一八年度は年間二〇〇万人以上の観光客が国内外から押し寄せたのである。

## 閉鎖と再開、そしてコロナウイルス

ボラカイ島での環境汚染の進行に対し、国内メディアで観光客数規制についての議論が聞かれはじめた二〇一八年には、ドゥテルテ大統領が島を訪れ、「ボラカイは汚水溜めだ」と発言した。それでも十分な対策が講じられないことに業を煮やした大統領は、同年四月から一〇月まで、前代未聞の半年間の島の閉鎖を決定した。

閉鎖中、観光はストップし、環境保全のための大規模な工事や改修がおこなわれた。当初は地元から強い反対を受けた島の閉鎖も、半年後の再開時には自然環境の大幅な改善によって肯定的に評価され、さらには今後も同様に、断続的な閉鎖による持続可能な観光開発を望む声も聞かれる。

そんな激変の渦中に生じたコロナ禍による観光の停止は、ボラカイをさらに不安定な状況に陥れた。島に残る観光従事者は今、観光化と脱観光化の狭間で揺れながら、外出や海水浴が禁止された人気がない美しいビーチを前に、いつになるかわからない再開を待ち続けている。

# かりそめの観光、ゆきずりの

## シージプシー

国士館大学講師

鈴木佑記

「アンダマン海の真珠」  
アンダマン海に浮かぶブーケット島は風光明媚な地として知られ、タイを代表する観光地のひとつである。同地には国内外から観光客が集まり、彼らの一部はここを拠点として近海に浮かぶ島々を観光する。

例えば、映画「ザ・ビーチ」の舞台となったマヤ湾があるピピ諸島は東方に浮かび、シュノーケリング・ポイントとして注目されつつあるスリン諸島は北方に位置している。これらの島々では、多額の出費が伴うマリン・ツーリズムが脚光を浴びる一方で、少数民族の村落を訪問するというエスニック・ツーリズムも同時にひっそりとおこなわれてきた。

## 一方通行の観光形態

ブーケット島周辺の島々には少数民族のモーケン人やウラク・ラウオイット人がおり、タイ語とは異なる言語を母語とする。かつては船を住まいとして、海を移動しながら暮らしていた漁民であった。そのような生活形態からシージプシーとよばれることがあるが、現在は定住している。それでもなお彼らの村落は、道路上の看板や地図などを通じてシージプシー村として流布しており、観光客がやって来る。他方で少数民族側も自ら



バスでシージプシー村を訪れる中国人団体観光客 (2016年)

「シージプシー」の記号を用いて、土産物や魚介類を観光客に販売しようとしている。

タイを訪れる観光客のなかでも、二〇一五年前から急増し、島嶼の各地で存在感を強めているのが中国人である。バスやボートに乗って各地のシージプシー村に団体で訪れ、村をそぞろ歩きし、そこかしこで自撮りしたあと、そそくさと別の場所へ移動する。たいていの観光客はシージプシーの販売物には見向きもしない。つまりここでのエスニック・ツーリズムは、観光客が一方的に彷彿し、記念撮影することで完結している。現地に経済的恩恵はほとんどもたらされていない。こうした地元の利益を無視した観光形態は以前より問題とされてきた。

## 観光の転換期

そこでスリン諸島では、シージプシーがシュノーケリングの案内役となり、現金収入を観光客から直接得られるようなコミュニティ・ベースド・ツーリズム(CBT)に着手したが、認知度が低いためか、まだ利用客は少ない。そしてこのコロナ禍である。島は観光客に閉ざされたままだ。これまで一時的であれ観光客との交流があったシージプシーだが、今まさに観光の文脈から離れるという転換期を迎えつつある。



CBTでモーケンの伝統的な船に乗りシュノーケリングをする観光客 (2010年)



シージプシーをアピールする魚介類販売店 (2016年)

# 観光と支援の結節点としての

## 民族文化観光

なかむら まさこ  
中村 香子  
東洋大学准教授

### 「文化観光村」の現状

「マサイ」に代表されるケニアの牧畜民は、近代化を拒絶する「伝統的」な人びとと位置づけられ、「観光のままざし」の対象となってきた。観光客が多く訪れる野生動物保護区周辺に居住する牧畜



ケニアの「文化観光村」では、男性が披露するダンスには観光客も参加できる。(2016年)

民は、主体的に「文化観光村」を作り、ダンスを披露し、ビーズの装身具を販売している。観光客はここを訪れば、アフリカの原野で「伝統的」に生きる牧畜民に出会うことができる。しかし入村料と装身具販売による収益は著しく限られており、観光は牧畜民の生活を支える基盤となるにはほど遠いのが現状である。

### 「光」と「影」の利用

そんな「文化観光村」に、近年、ひとつの変化が見られるようになった。人びとはダンスを見せたあと、就学前の子どもに歌をうたわさせて学資のスポンサーを募ったり、女性は各自がおかれている状況の「ストーリー」を語ることを始めたのだ。「ストーリー」は、しばしば貧困、児童婚、家庭内暴力といった、開発プロジェクトが用いるキーワードを含んでいる。

大自然のなかで「伝統的」に生きる牧畜民の姿が、アフリカの「光」を象徴するステレオタイプのひとつであるならば、貧困や就学率の低さは、アフリカの「影」を象徴するもうひとつのステレオタイプである。



観光客の支援で建設された小学校(2016年)

特に、社会的弱者とされる子どもと女性の姿はメディアでもよくとりあげられており、この取り組みは、ダークツーリズム(戦争、災害、貧困などといった「影」を対象とする観光)やスタディ・ツーリズムといった新しい観光の潮流にもマツチする。そして、ごく稀なことはあるが、これが学校建設や井戸作りへの寄付といった大きな支援につながることもある。「文化観光村」は観光と支援を結びつける舞台となりつつあるのだ。

### 観光とのゆるい繋がり

人びとは、観光業の「ひよっとすると利益を生むかもしれない」という可能性を評価しつつも、過度に期待せず、ゆるい繋がりを維持している。彼らはこれまでに、テロや内戦、 Ebola 出血熱などの経験をとおして、一瞬にして消えてしまう観光客とのつきあい方を学んできた。コロナ禍の現在は、牧畜に専念しているか、もしくはまったく別の、新しい可能性を見つけ出しているにちがいない。

# アートツーリズムと創造都市

## フランス、ナント市の芸術祭と地域振興

おちいくの  
越智 郁乃  
東北大学准教授

### 芸術祭と都市再開発

パリから高速鉄道で二時間のナント市では、二〇二二年から毎年、バカンスの時期になると芸術祭「ボーージュア・ナント」(以下「ナントへの旅」)が開かれ、旧市街地や郊外の再開発地に大胆な現代アート作品が出現する。一昨年の目玉は旧市街の歴史的な噴水を用いた作品で、噴水が外に飛ぶように改変され、わたしも直撃を受けた。こうした「遊び心」のある作品が都市に組み込まれ、建物自体が作品であるものや宿泊できる作品もある。「ナントへの旅」はこうした文化資源に観光客だけでなく住民をも誘導してその場所の再解釈を促



1598年に「ナントの勅令」が発せられたブルターニュ公爵城の城壁に取り付けられた作品《滑走する風景》(Tact architects & Tanguy Robert作、2017年)。滑り台からは普段見ることができない視点で堀や城壁、街の風景を見ることができ(2018年)

し、都市を創造し続けている。

### 文化芸術政策による経済復興

一八世紀の奴隷貿易による舟運業で発展したナントは、一九八〇年代に造船所が閉鎖され、経済的に衰退した。市は経済発展の梃入れとして文化政策を押し進め、アートの展示やクラシックコンサートなど、大規模な文化芸術イベントを公共空間で開催することを奨励した。会場として用いられたのが、旧造船施設や工場などの過去の遺産で

ある。そこに大道芸集団ロワイヤル・ド・リュクスを誘致し、機械仕掛けのアトラクションを備えた公園マシンド・リルをはじめ、文化施設を次々と展開。再び人びとを集めることであらたな都市を構想してきた。その動きのなかで始まった「ナントへの旅」は、観光政策の一環としておこなわれている。二〇一〇年と比較すると二〇一七年には宿泊者数六四パーセント増、夏季の夜間営業店舗数七七パーセント増、夏の訪問客数六七万人(ナント市人口は約三〇万人)となり、地域経済への貢献が認められる。一方で、「観光客が増えすぎた」という否定的な意見や、今年、新型コロナウイルス感染症が拡大してからは「街が住民の手に戻った」という声もあると聞く。

### 「旅」は誰のもの？

フランスでは一九六八年の五月革命を経て、経済的に平等な社会を求める声が高まり、また地域文化を振興する運動が起こった。ミッテラン政権以降、地方分権化と文化予算の拡大が進み、文化と経済を結びつけた政策が展開された。その根底にあるのは、誰もが文化芸術を享受できる社会を目指す「文化の民主化」である。こうした考えを基に再度ナントの芸術祭について見直すならば、「ナントへの旅」は誰のものか」ということが問われているのではないだろうか。



旧造船所を用いたマシンド・リルのアトリエと機械仕掛けの巨大な象。マシンド・リルでは、ナント生まれの作家ジュール・ヴェルヌの世界観を表現したマシンが体験できる(2018年)

# 神になる旧日本軍人、

## それを訪ねる日本人

藤野 陽平  
北海道大学准教授

### 台湾の鬼々日本の鬼

台湾では「鬼」という存在がいとされている。日本の「オニ」ではなく、台湾語で「クイ」とよばれるもので、正しく祀らなければ祟りをなす、恐ろしい亡霊のようなものを意味する。天寿をまっとうせず死んだ者は鬼として地獄に落ち、その恨みからこの世に祟りをなす。ただし、鬼は永久に鬼なのではなく、正しく祀られるうちに、福をもたらす下級の神になることもある。

台湾で戦死した旧日本軍人は彼らを祀る家族がないので、鬼となってしまう。この旧日本軍人の祟りを避けようと、彼らを神として祀る施設が存在する。多くの場合、それは小さな祠であり、墓場などの不吉とされる場所に位置していたりして、訪れる人はほほえないのだが、なかには実在の人物を祀り、地域で信仰を集めている場所もある。

### 親日か民俗宗教か

こうした場所は、近年インターネットを中心に、

マスメディアやガイドブック等で取り上げられ、「親日的な台湾では旧日本軍人が神として崇められている」と勘違いをして訪問する日本人が増えている。以前は保守的な思想に共感する人が中心であったが、近年は幅広い層へと広がりを見せている。問題はこうした言説が、背景に存在する民俗宗教の価値観に触れることはなく、親日台湾言説にのみ基づいて作られている点である。

旧日本軍人を祀る施設は、いわゆる観光地とは異なり、広く台湾人が参拝するような場所ではない。鬼を恐れつつも、その強烈な力を頼りとする台湾人信者たちと、それを親日的だと勘違いして感動する日本人観光客らは同床異夢に陥っている。それでも、あらかじめ定められたコースを巡るバックツアーが主流であった時代には見られなかった、あらたなコミュニケーションが、彼らのあいだに生じていると評



台南市の慶隆廟(けいりゅうびょう)に祀られる吉原元帥(前列右、2019年)

価できるのかもしれない。今後こうした場所がステレオタイプを強化する都合のいい場所ではなく、そこに暮らす人びとの知恵を学ぶフィールドとなることを願うばかりである。

# 止まらなかつた世界のいくつもの片隅に

## ——精神的移動から考えるこれからの観光

岡本 健

近畿大学准教授

### 止まらなかつた世界

新型コロナウイルスの感染を予防するために、人の移動や集まりは避けられるべきこととなった。すなわち、これらの経験が商品化されたものといえる観光産業は大ダメージを受けた。一方で、止まらなかつた移動、むしろ、以前よりも活性化した移動があった。それは、情報空間や虚構空間への「精神的移動」だ。

現実空間上の人の移動や集合を前提とした各種の取り組みは軒並み中止を余儀なくされたが、定額制(サブスクリプション)でのコンテンツ配信サービスやデジタルゲーム、アナログゲーム、プラモデルなどの身体的移動を伴わずに刺激を得られる遊びは止まることなく、その利用はむしろ好調であった。このような世界で、これからの観光はどうなっていくのか。

### 「精神的移動」も包摂した観光へ

わたしはこれまで、アニメ聖地巡礼について研究してきた。アニメの背景として描かれた場所をファンが探し出し、その情報はネットを通じて情報空間に発信され、後続のファンはその情報を頼

りに現地を訪れる。例えば、上の写真は佐賀県唐津市にある旧三菱合資会社唐津支店本館(唐津市歴史民俗資料館)なのだ。二〇一八年に公開されたテレビアニメ「ゾンビランドサガ」の舞台となり、ファンが一目見ようと訪れるようになった。そもそもこの行動はアニメという物語の世界すなわち、虚構空間を体験することから始まっている。アニメ聖地巡礼は、コンテンツを体験するという、物語の世界への精神的な旅からスタートしているといえる。このように考えると、そもそもすべての観光で、現地に行く前になんらかの精神的移動が生起し、それによって身体的移動が駆動されていることに気がつく。

バーチャル・リアリティなど、人間の精神的移動をサポートする技術が普及し、かなり安価でその成果を享受できるようになってきた。現実空間上の移動に意味がないなどというつもりはない。ただ、今、このとき、人間にとっての観光の意味を考えると、身体的移動と精神的移動のそれぞれを今一度つぎさに見つめ直すとともに、それらのかかわり方について考察を深める必要があると思うのだ。



「ゾンビランドサガ」の聖地「旧三菱合資会社唐津支店本館(唐津市歴史民俗資料館)」(2019年)

# アンデス山中に残る古道

わたなべ しんや  
渡部 森哉  
南山大学教授



**インカ帝国時代の道を歩いてみた**  
ウエコ・デル・インカ（インカのくぼみ）という名前のついた  
インカ道の一部とわたし  
（掲載写真はすべてペルーにて2002年に撮影）

南米大陸に15世紀から16世紀にかけてインカ帝国という国が栄えた。現在のペルー共和国を中心に、南北4000キロメートルという広大な範囲を支配下におさめていた。地方の住民を統制するために帝国が整備した道は、現在「インカ道」とよばれ、世界遺産にも登録されている。



## 現在のインカ道

わたしは二〇〇二年にペルー北部高地のインカ道を、直線距離で三〇〇キロメートル、実際には四〇〇キロメートルにわたって、二〇日間かけてテント



インカ道

を担いで歩いた。インカ道は、ペルーとボリビア、エクアドル、チリ、アルゼンチン、コロンビアの六カ国で世界遺産に申請され、二〇一四年に登録された。二〇〇二年当時、断片的な調査はあったのだが、考古学者が長距離を実際に歩いて調査したという例は聞いたことがなかった。ペルー南部に位置する首都クスコ周辺のインカ道の一部が観光用に整備されていただけであり、ペルー北部における調査は皆無であった。

遺跡の発掘調査をしていたわたしを、フェリペ・バレラという人物が突然訪ねてきた。研究者ではなく、「カミナンテ（歩く人）」を名乗り、自分が歩いたインカ道について滔々（とうたう）と語った。見た目はじつに怪しい。彼が見つけたというインカ道を見に行くと、それは本当にあり、数時間歩いてみた。そして、インカ道の調査には、部分的な点ではなく道という線で確認することの必要性を実感した。わたしはフェリペと一緒に約三週間歩くことを決心した。

きな石がエクアドルまで二〇〇〇キロメートル以上も運ばれたことがわかってる。

インカの道はある場所から次の場所へ移動するのに、最短のルートをとる。急斜面もまっすぐに進むその道は歩くとき疲れる。登山道であれば少しずつ登り、景色のいいところを通過し、尾根のそばを進む。しかし、インカ道に景色は関係なく、ある地点からある地点までを一気に進む。現代の車道であればくねくね曲がるが、車輪が使われなかったインカ道では、登り道も基本的に最短距離で移動する。



ワンカパンバ川に残る朽ち果てた橋の痕跡

山地のインカの道を歩いて気づいたのは、川沿いに走ったり川を横切ったりすることが頻繁にあるということである。登山経験のあるわたしは、いちばん重い荷物である水を運搬しなくてよいように設計されているのだと感心した。しかし、逆にそれがすぐに放棄される原因ともなった。川を横切るといふことは、橋をかけるということであり、定期的なかけ替える維持作業が必要となる。アンデスの吊り橋はマゲイという植物製であり、腐食するため二年に一回のペースでかけ替えなければならなかった。維持作業が滞れば、すぐに放棄される。

インカ道の建設は労働力を投下する対象でもあったのだろう。というのもインカ道はそれ以前の道を再利用して建設したのではなく、新規に造られたものだから、効率を重視して整備されたわけではないのである。少なくともインカ道沿いにある遺跡はすべてインカ期のものであった。インカ帝国は先行する文化の成果を取り入れた集大成と言われているのであるが、インカの人びとはゼロから道や建物を造ったのである。

現在、ペルー北部の人びとは、インカの道の存在をほとんど知らない。多くの部分が廃道となっているためである。アンデス山脈は南北に連なる。現在は、高地にある目的地に向かうには、海岸地帯から山地に入る東西の道が主流である。山から山へ南北に移動するインカ道は途切れ途切れになり、長距離移動に利用されることはなくなった。また、川を渡るには、橋が利用されていたのだが、それが朽ち果てた箇所では渡渉しなければならなかったため、徒歩での移動はより困難なものとなっていた。

インカ道を歩くためにはまず、どれがインカの道かを同定する必要がある。インカ道は宿駅のように各地に設置された行政センターと行政センターを繋いでいる。だからインカ時代の行政センターであった遺跡から歩き始める。そこから伸びる道は必ずある。ところが途中でしばしばわからなくなる。見失った場合は、スペイン人が残した記録と現在の地図を対照させながら、ルートを推定する。そうしたところを狙っていくと、道がある。多くのインカ道は、斜面を切り崩した形で建設されているので形態からも判断できる。また現在多くが廃道となっているインカ道は、修繕して再利用されていないがゆえに、逆に同定しやすい。そして歩いてみると未登録の見つかることも多い。たこともない遺跡に遭遇する。

## インカ道の意味

車輪をもたなかったアメリカ大陸の古代文明。インカ道をとおりるのは人間のほかにリヤマとアルパカというラクダ科動物に限定され、現在も車がおとることはない。動物に頼らず、人力で多くのものを運んだ記録もある。例えばクスコ周辺で切り出した建築用の大



インカ道の真ん中に建つ家。平らだから建設したそうだ

**重要なお知らせ**

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性があります。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

**梅棹忠夫生誕100年記念企画展**

「知的生産のフロンティア」  
みんなく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブス資料とデジタルデータペーパーをおして、フィールドワークから著作への「知的生産をくわしく紹介します。」  
会期 12月1日(火)まで  
会場 本館企画展示場



「知的生産の技術」のための「こざね」(撮影：尼川匡志)

**「ネパールのサーランギ音楽」**

日時 2021年1月30日(土)  
13時30分～16時(13時開場)  
司会 福岡正太(本館教授)  
解説 南真木人(本館准教授)

●みんなく無料シャトルバスのご案内  
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを特別展「先住民の宝」の会期中に運行します。  
運行日 12月15日(火)までの土曜・日曜・祝日  
1日11往復、所要時間10分、無料  
※急遽予定を変更する場合があります。  
※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、座席数などが従来の運行と異なります。くわしくはみんなくホームページをご覧ください。

**共催展**

京都大学総合博物館2020年度特別展  
「梅棹忠夫生誕100年記念  
知的生産のフロンティア」  
会期 2021年1月13日(水)～3月14日(日)  
会場 京都大学総合博物館  
休館日 月・火曜日(平日・祝日にかかわらず)  
主催 京都大学総合博物館、国立民族学博物館  
共催 京都大学野生動物研究センター、高等研究院、文学研究科、理学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、人間・環境学研究所、地球環境学、人文科学研究所、東南アジア地域研究所、霊長類研究所、大学図書館、霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーダーシップ大学院、京都大学土山岳会  
協力 三菱自動車工業株式会社

**編集代表 鈴木 董・近藤 二郎・赤堀 雅幸**

『中東・オリент文化事典』  
丸善出版 20,000円(税別)

現代の中東は、イスラーム以降の文明と、イスラーム以前の古代オリントの文明の2層から成り立っており、両者の間の断絶と連続を明らかにしようとする試みは非常に限られてきた。日本国内外の中東・オリント研究者・実務者205名が総力をあけて編集した本書は、この課題の解明に向けた第一歩である。



それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！

**刊行物紹介**

■広瀬 浩二郎 著  
『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！  
——世界の感触を取り戻すために』  
小ざ子社 1,500円(税別)  
コロナ禍に直面し、人・物との濃厚接触が忌避される昨今、あらためて「さわる」ことの意味を考察する。「世界の感触」というテーマの下、民博所蔵の資料写真約60点を紹介しつつ、「ユニバーサル・ミュージアム」とは何かを多角的に考える。



お問い合わせ(本館 広報係)  
電話 06-6878-8560 / FAX 06-6875-0401  
https://www.minpaku.ac.jp/

**特別展 「先住民の宝」**  
世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか? 「宝」にこめられた思いとは何なのか? 本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。  
会期 12月15日(火)まで  
会場 特別展示館



舟(台湾、タオ)

**みんなく映画会**  
みんなく映画会  
本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌シリーズ」のなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。  
会場 淀川文化創造館シアターセブン  
申込方法 要事前申込(先着順/定員26名、参加無料)  
申込期間 12月23日(水)まで  
(定員になり次第受付終了)  
※みんなくホームページのイベント予約専用サイトよりお申し込みください。  
※本映画会は会場参加のほか、WEBライブ中継(要事前申込)でもご参加いただけます。  
「セネガルを越える人と地域ラジオ」  
日時 2021年1月23日(土)  
13時30分～16時(13時開場)  
司会 福岡正太(本館教授)  
解説 三島禎子(本館准教授)

**みんなくゼミナール**

※申込先着順、参加無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)  
※予約は本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。左記の該当期間中にお申し込みください。  
※事前予約の方は入場整理券を当日11時から配付します。

第505回 12月19日(土)13時30分～15時(13時開場)  
民博研究の政策としての応用  
——トランスフォーメティブ研究を始め  
講師 出口正之(本館教授)  
会場 本館講堂(定員160名)

民博の展示品を見て皆さんは何を感じますか? もし、従来の常識が覆されたなら、それがすべての「研究」の始まりです。民博の研究が税制、NPO政策、大阪の活性化政策などに活かされています。「常識の残像」から脱するために民博がいかに役立っているかをお話しします。

【申込方法】  
■一般受付  
期間:12月17日(木)まで  
・オンライン予約(定員100名)  
みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。  
・当日参加申込(定員30名)  
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。  
※友の会(維持会員・正会員)電話先行受付は終了しました。

第506回 2021年1月16日(土)  
13時30分～15時(13時開場)  
画像資料とデータベース  
——「地域研究画像デジタルライブラリ」の取り組みから  
講師 丸川雄三(本館准教授)  
会場 本館セミナー室(定員105名)  
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。  
民博では、世界各地で撮影された調査写真のデータベース構築を進めています。実際の取り組みを例に、画像資料の活用可能性・情報技術もちいた活用支援についてお話しします。

【申込方法】  
■一般受付  
期間:12月21日(月)～2021年1月14日(木)  
・オンライン予約(定員65名)  
みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。  
・当日参加申込(定員20名)  
11時から本館2階セミナー室前にて受け付けます。

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話をしよう  
会場 第5セミナー室  
※申込不要(当日先着順/定員42名、参加無料(要展示観覧券))  
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域/国の最新情報」「みんなく展示資料」について分かりやすくお話しします。  
12月6日(日)14時30分～15時15分(14時開場)  
台湾原住民運動40年  
「高山青」から移行期正義まで  
話者 野林厚志(本館教授)

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

**友の会**

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

**友の会講演会**

第507回 12月5日(土)13時30分～14時40分  
海洋考古学の世界  
——沖繩の水中文化遺産とその魅力  
講師 小野林太郎(本館准教授)  
会場 本館講堂(定員160名)

海洋考古学は、海と人類の歴史を探索する学問です。そのフィールドは、海中の遺跡だけでなく、島や沿岸域に残されたさまざまな遺跡が対象となります。この講演では、そのなかでもとくに水中文化遺産を取り上げ、これまで研究してきた沖繩県石垣島の海底遺跡を事例に、その魅力や水中文化遺産の保護の現状について紹介いたします。あわせて、水中文化遺産をめぐる世界的な動きや今後の課題についても解説します。

【聴講方法】  
①館内講堂にて聴講  
友の会会員は予約不要(当日会員証提示)  
一般は500円(受付フォームより要予約)  
②オンライン中継での聴講(友の会会員のみ/受付フォームより要予約)  
受付フォーム(友の会ホームページ内)  
https://www.senri-f.or.jp/507tomo/

第508回 2021年1月9日(土)  
13時30分～14時40分  
国立アイヌ民族博物館の魅力と課題  
——開館半年を迎えて  
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館館長)  
会場 本館第5セミナー室(定員40名)  
※メイン会場が満席の場合は、中継会場(第7セミナー室、定員13名)のご案内します。

【聴講方法】  
会場定員数の都合、友の会会員に限定して開催します。  
①館内セミナー室にて聴講(要予約)  
②オンライン中継での聴講(受付フォームより要予約)  
受付フォーム(友の会ホームページ内)  
https://www.senri-f.or.jp/508tomo/

# 世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

## アイヌのテンキとそのひろがり

齋藤 玲子 民博学術資源研究開発センター

伝統的な暮らしにおいて、衣服や生活用具など、その素材の多くを自然のなかから手にいれてきたアイヌ。北太平洋沿岸の先住民にひろく利用されたテンキグサも、そうした素材のひとつである。今月はテンキグサを素材とする入れ物「テンキ」に注目し、アイヌのバスケットリー文化の一端を紹介する。

テンキグサ (*Lymnopus mollis*) という植物をご存じだろうか。別名ハマニンニクともいうが、ネギの仲間ではなく、海岸の砂浜に生育するイネ科の多年生草本である。北米とアジアの両大陸に分布し、日本では、太平洋側は関東以北、日本海側は九州北部まで見られ、これが南限とされている。

テンキグサを素材にしたバスケットリーは、千島列島の先、カムチャツカやアリューシャン列島、そして北米に至るまで、北太平洋沿岸の先住民にひろく使われてきた。一八〇一―一九世紀の民族誌にも記録され、実物も数多く残されている。

テンキグサという和名は、この草の葉を編んで作られた入れ物「テンキ」に由来するとされる。テンキ自体の語源については、知里真志保の『分類アイヌ語辞典第一巻植物篇』（日本常民文化研究所、一九五三年）に二説があげられており、旧アイヌ民族博物館のウェブサイト「アイヌと自然デジタル図鑑」でも読むことができるので、関心のあ

るかたはご覧いただきたい。

### アイヌのバスケットリー文化

アイヌの伝統的な生活は、衣服や住居をはじめ植物製の品々にあふれていた。植物素材を編み組みして作るバスケットリーにあたるものをあげると、家のなかにはござが敷き詰められ、簾や蓆もあちこちで使われた。北海道のアイヌ語でサラニブとよばれる袋は、運搬や貯蔵などに用いられ、大きさも製作技法も素材も多様であった。身につけるものではわらじのような履物があり、大きなものには魚を捕る罟や船の帆があった。素材は、シナノキ、オヒヨウ、ヤマブドウの樹皮、ガマやヨシ、オギなどが用いられた。

このようにさまざまなバスケットリーがあるなかで、じつは、テンキはアイヌの民具として一般的なものではなかった。収集地が明らかでないテンキは、ほとんどが千島のものである。千島アイヌは人口がら、試行錯誤を重ねて、復元に成功したのだ。わたしは知里さんからテンキグサ製のバスケットリーに関する問い合わせを受け、海外の文献を含めてまとめたものを送ったことがあった。

テンキとよばれるものは大きくわけてふたつのタイプがあり、巻き編み技法 (coil) で、上から見て円や楕円形になるように作られたしつかりとした容器と、振り編み技法 (twill) で作られた袋型のものがある。カムチャツカの先住民コリヤークの民族誌で両タイプのバスケットリーを精細に描いた文献があり、テンキグサを刈りとする時期に関する記述など、他地域の製作技術も知里さんが復元する際の参考になったようだ。

その後、知里さんはみんなくをはじめ、各地で実演や講習会をおこない、テンキ作りをひろめる活動を続けられた。わたしも二〇〇六年と二〇〇七年に、勤務していた北海道立北方民族博物館（網走市）に知里さんを招き、テンキ作りの講習会をおこなった。二〇〇七年にはテンキグサを刈り、

その葉をよりわけて天日干しするところから始め、小さな容器を作った。知里さんは、登別付近のテンキグサよりもオホーツク海岸のものの方が背丈が高く、良い材料が得られたと喜んでた。また、登別は夏に雨が多く、テンキグサの葉をうまく乾燥できない、とおっしゃっていたことも思い出す。知里さんが復元をされて以降、テンキ作りをする人も出てきたが、材料の準備から完成まで手間も時間もかかるためなのか、普及したとまでは言えない。また、歴史などわかっていないことも多い。このバスケットリーの連載を読み返し、テンキに関する世界規模での比較研究と歴史研究の可能性を改めて感じている。



テンキグサの刈りとり。網走市の海岸にて(2007年)



上：鳥居龍藏が色丹島で収集したテンキ (K0002352)。みんなくには鳥居収集のものをはじめ10点あまりのテンキがある  
中：テンキグサ製と思われるアラスカのイヌイトのバスケット。1990年ごろの収集と推定 (H0227990)  
下：アリュートのテンキグサ製のものと思われるバスケット。1880年ごろに収集 (H0076158)



知里真希さん(左)からテンキについて聞く筆者(右)(2007年)

が少なく、一八八四年に北千島から色丹島に強制移住させられたときは九七人、人類学者の鳥居龍藏が一八九九年に色丹島を調査したときには六二人だった。さらに、北海道への戦後移住があり、二〇世紀なかごろに千島アイヌであることを表明する人はいなくなったとされる。そのため、千島で収集されたテンキも多くはなく、時代がわかつているのも一九世紀から二〇世紀前半までである。古くは、和人が残した江戸時代の記録にも見られるが、エトロフ、シコタン、カラフトの産物として記されるなど、今の北海道ではあまり作られていなかったことがうかがえる。

### 製作技術の復元

アイヌの他のバスケットリーとは異なり、テンキは製作技術が継承されていなかったが、登別市の知里真希さんが生前、二〇〇〇年ごろに復元した。知里さんは、みんなくを含むいくつかの博物館が所蔵するテンキを調査し、文献などを参考にしな

## ムスリム女性の装い

民博 人類文明誌研究部 藤本 透子



ウズベク女性が着用したバランジ  
(中国、H0105908、中央・北アジア  
展示)

変わりの一端にもふれることができる。中央アジアにイスラームが伝播したのは、八世紀にさかのぼる。オアシス都市の定住民がいち早くムスリムとなり、草原地帯の遊牧民はそれより遅れてイスラームを徐々に受容した。

オアシス都市に暮らす女性は、一九世紀後半から二〇世紀初頭には、外出時にチャチヴァンとよばれる織り目の粗い布を顔の前に垂らし、バランジとよばれるヴェールをかぶった。バランジは丈の長い上着のような形をしているが、頭部からすっぽりかぶるので袖に手をおすことはなく、「デザイン化された「飾り袖」が後ろで結わえられている。一方、草原地帯に暮らすカザフ人の場合、既婚女性はキメシエクとよばれるヴェールを着用した。キメシエクは白い綿布を縫って作られ、頭部から胸部までを覆う。バランジに比べると丈が短く顔も出さすという、遊牧民としての動きやすさを重視した装いであった。

ソ連時代初期に、こうしたヴェール、特



西アジア展示  
「信仰」セクション

西アジアをはじめとする各地のムスリム女性の服装  
(H0253290ほか)



中央・北アジア展示  
「中央アジア」セクション

中央アジアのムスリム女性の服装  
(H0105908ほか)



アフリカ展示  
「装う」セクション

西アフリカのムスリム女性の服装  
(H0222362ほか)



東南アジア展示  
「都市の風景」セクション

婦人服店の店先でマネキンがかぶっているヴェール  
(000033771ほか)

にバランジはムスリム女性たちの後進性の象徴とみなされ、女性解放運動のターゲットとなった。バランジを一掃するキャンペーンがあまりにも急激に進められたために、社会的混乱も生じた。その後、中央アジアでは次第に、頭部のみにスカーフを巻くスタイルが既婚女性のあいだで定着していった。

### ライフステージも反映

中央アジアの女性たちの装いは、もともとライフステージを反映したものであった。例えばカザフ人の場合、未婚女性は長い髪を三つ編みにして垂らし、毛皮で縁取りされた布製の帽子をかぶった。前述のようにキメシエクを着用して髪を見せないのは、既婚女性のみであった。既婚女性が髪を覆うという習慣は、スカーフを頭部に巻くというかたちで、ソ連時代にも村落部を中心に続いた。カザフ人のあいだで、嫁入りの際に花婿の母親が花嫁の頭部に白いスカーフをかぶせるのは、既婚者となったことを象徴的に示している。

### 生活場面による使い分け

ソ連崩壊後には、未婚か既婚かにかかわらず信仰心をあらわす服装として、丈の長いスカートに長そでの上着を着て、ヒジヨブとよばれる新しいタイプのヴェールをか

ムスリムの特徴として、ヴェールで頭部を覆い隠した女性の姿を思い浮かべる方も多いかもしれない。クルアーンには「外部に出ていける部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう」(井筒俊彦訳『コーラン』(中)岩波書店、一九五八年)とあり、身内以外に「美しいところ」を見せてはならないとされる。ただし、どのように身体を覆うべきかという具体的な記述はない。このため、イスラームが世界に広がる過程で、地域によってさまざまな服装が生まれた。

例えば西アジア展示場では、アラビア半島のベドウィンのほか、エジプト、アフガニスタンとともに、シンガポールの女性の服装を見ることが出来る。身体の線があらわにならないゆったりとした着こなしは共通するが、ヴェールの形や色、顔をどの程度まで隠すかはさまざまである。東南アジア展示場にも、ムスリム女性のファッションを示すコーナーがある。マレーシアの女性たちは、さまざまなヴェールの巻き方を考案して、おしゃれに工夫を凝らすという。また、頭部に華やかな色合いの布を巻き、首のまわりが広めに開いた西アフリカの女性の衣服は、ムスリムの装いの多様性を示している。

### 時代の変化とともに

中央・北アジア展示場では、装いの移り



ソ連時代に定着した、スカーフを頭部に巻くスタイル(カザフスタン、H0278396、中央・北アジア展示)

カザフの既婚女性が着用したキメシエク(中国、H0105922、中央・北アジア展示)

ぶる女性たちもあらわれた。しかし、全体から見ればこうした女性はごく少数にとどまっている。

特に都市部では、ふだんは何もかぶらない女性の方が多い。ただし、イスラームを強く意識しているようには見えない女性たちも、モスクに行くときや、聖者廟に詣るときなどには装いを少し変える。モスクでは礼拝や結婚儀礼をおこない、聖者廟では子授けや病気の治癒を願う。また、墓参の際にも、死者の安寧を願ってクルアーンを朗唱する習慣がある。こうした祈りの場面では、スカーフで頭部を覆う。現在の中央アジアでは、このように生活の場面によって、柔軟な対応をしているムスリム女性が多い。



コロナ時代の民族誌映画祭

川瀬 慈  
民博 人類基礎理論研究部

文化事象の記録と研究を映画的手法でおこなう民族誌映画の制作は、映像人類学の中心的な実践に位置付けられてきた。近年、欧州人類学映画祭機構(CAFFE)に属する学術映画祭を基盤に、人類学における映像実践をめぐる議論が盛り上がりつつある。わたしは二〇二〇年五月にドイツのゲッティンゲン国際民族誌映画祭の審査委員を担当することになった。一九九四年にスタートし隔年で開催されてきた本映画祭であるが、第二五回の今回は、新型コロナウイルスの世界的な蔓延を受け、オンラインでの開催となった。

ゲッティンゲン国際民族誌映画祭

本映画祭はドイツ国立科学映画研究所(IWF)の元職員が中心となって運営される。IWFは、一九五〇年代半ばの設立時から一九九〇年代初頭まで、制作者の存在をできうる限り排した観察記録の手法に基づく映像百科事典「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」(通称ECフィルム)の制作をおこなってきたことで知られる。IWFは制作したフィルムを世界各地の研究・教育機関に売り込むことに成功し、日本を含む各国の学術映像の制作基準にきわめて大きな影響を与えた。国立民族学博物館も一三〇〇本を超えるECフィルムをIWFより購入している。

本映画祭はおもに、メインプログラムと学生映画部門によって構成される。メインプログラムは毎回テーマを設定して、数百の出品作から五〇〜六〇本の作品を選抜する。今回も、(女性による危機への対応)、(文化遺産保護への取り組み)、(都市化の影響)



作品選抜委員会による上映プログラム作成準備の様子  
(撮影：ロベルト・ジャク、2014年)

を以てするテーマが掲げられた。学生映画部門はコンペティションが設けられ、二〇本の上映作(一七本の出品作より選抜)のなかから最優秀作品を一本選ぶ。本部門の審査は、わたしとトロムソ大学の映像人類学者のトロンド・ワグ、マインツ大学の社会人類学者ジモネ・ファイファアの三名でおこなった。三名の審査委員の学術映画に求める理想が決定的に異なるという背景もあり、受賞作を選定するオンライン

新型コロナウイルスの世界的蔓延に、映画業界も多大なる影響を受けたことは今さら言うまでもない。映画館は長期間の休業を余儀なくされ、主要な映画祭はオンライン開催へと移行した。今回は今年を振り返るため、特別編として欧州の主要な学術映画祭であるゲッティンゲン国際民族誌映画祭のオンライン開催の様子を紹介する。



2020年の学生映画部門最優秀作品「Flox」  
(提供：ハディ・ムハンマド)

協議は難航し、三日間、じつに八時間もの時間を費やした。

最終的に、最優秀作品にはエジプト人監督ハディ・ムハンマドが撮影・制作した「Flox」が選ばれた。本作は、カイロ市内の混沌とした交通状況におけるミニバス運転手たちの仕事の様子を描く。男性中心のマッチョな競争社会における、運転手間の狡猾な駆け引き、顧客との些細かつ豊穡なやりとり、さらには運転技術をめぐる創意工夫を記録した観察映画である。多くの入選作が、人類学者による長期のフィールドワークに基づき、特定の個人やその家族を淡々と観察する手法をとるのに対し、本作は運転手間のつながり、仕事が要求する緊張感を生々しく、ときに荒々しく伝えていた点が評価された。

オンライン上映の可能性

ところで、わたしと本映画祭とのかわりなところは深い。第九回大会(二〇〇八年)では一研究者として入選した拙作の発表をおこない、第一回大会(二〇二二年)では学生映画部門の審査委員を担当し、第二回大会(二〇一四年)では出品作のなかから入選作を絞る作品選抜委員を務めると同時に映画祭のプログラム作りにかかわった。例年はゲッティンゲン市内にある中世の大聖堂を改良した荘厳な雰囲気をもち文書館を利用して映画祭をおこなう。今回はオンライン開催という

ことで、参加者は映画祭事務局よりIDとパスワードを受けとり、オンライン上の動画サイトVimeo上に設けられた映画祭のページ(入選作品をセクション)にまとめたいわば映像アーカイブ)に行き、関心のある作品を二週間にわたり視聴することとなった。また、オンライン上で視聴者と作品の監督が質疑応答をおこなう時間も設けられた。例年は、せいぜい五日間の開催期間である。参加者は、プログラム上にある気になった作品を見逃すことが多い。しかしながら今回は、二週間という比較的余裕のある期間、参加者は関心をもった作品を何度もオンラインで視聴することが許された。映画祭ディレクターによれば、例年であれば三〇〇人程の参加者であるが、オンラインで開催した今年は、通常の四倍にあたる二二〇〇人が参加し議論もじつに充実していたとのことであった。

時差への対応など決して容易ではないが、パネミック終息後も、映画祭現場でのプログラムと並行してオンラインを通して関連企画が探求されるべきなのかもしれない。



2020年の学生映画部門最優秀作品「Flox」の制作現場  
(提供：ハディ・ムハンマド)



## 編集後記

観光庁によれば、観光需要喚起策「GoTo トラベル」の利用者は10月15日までに約3138万人に上り、割引支援額は約1397億円になるという。読者の皆さんももう利用されたかもしれない。新型コロナウイルス感染症の影響が甚大な業種のひとつが観光産業である。本号の特集「激変する世界と観光の現在」では、コロナ以前から変化し続ける観光の現場に焦点をあてる。目を開かされたのは、コロナが世界を変えたのではない、新型コロナウイルスの拡大が常に変化する世界の動きを止めたのだという逆説である。そして、絶えず流動する現代社会を象徴的に示すのが観光現象だという。そうであれば、変化する世界の休止状態にいかに向き合うかのヒントが、縮図である観光の現場に隠されているかもしれない。ケニアの牧畜民に倣って、あらゆる可能性をしなやかに、強かに探る。あるいは、コロナ後の身体的移動の再開を見据え、「精神的移動」をより豊かにするよう取りくむ等々だ。手前味噌になるが、前号の特集「世界温泉めぐり」はそのような試みになっていたのではないか。期せずして、日本文化人類学会の学会誌『文化人類学』最新号（85巻2号）の特集も「文化遺産、ツーリズム、防災」である。併せてご覧いただければと思う。（南真木人）

●表紙：巨大な観光クルーズ船。一度に2000人の観光客がやってくる  
（撮影：福井栄二郎、ヴァヌアツ、アネイチウム島、2018年）

## 次号の予告

特集

## 「めでたい場の食」（仮）

## みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

### 維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

### ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
（電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）



## 月刊みんぱく 2020年12月号

第44巻第12号通巻第519号 2020年12月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 南真木人（編集長） 上羽陽子 齋藤晃

菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 株式会社 遊文舎

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

みんぱくフェイスブック

みんぱくツイッター

みんぱくインスタグラム

みんぱくYouTube

<https://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

